

トビイロウンカのは場における季節発生活消長の予察法について

深 町 三 朗

(鹿児島県農業試験場)

トビイロウンカのは場における季節的発生活消長を予察灯への飛来を基に検討したので、その結果の概要を報告する。

方 法

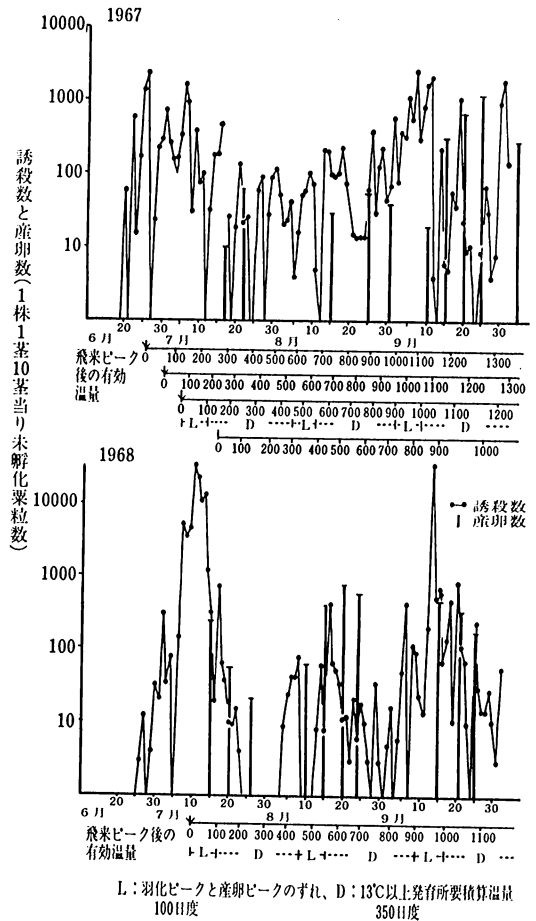
1967年、1968年における農試験場内予察灯でのトビイロウンカの日別誘殺状況と同予察は場において、7月15日以降、5日から7日間隔で定期的に、1株1茎、10株を毎回採集して、室内で分解し、産卵状況を調査した。は場の季節消長は本田初期飛来ピークを基準として、発育零点を13°Cとして、積算温度の方法の適用を検討した。

結 果

第1図に示すように、発生の乱れた1967年は、6月26日、7月1日、7月6日、7月16日の4回、単一な飛来の1968年は7月10日の1回のピークについて検討した。久野(1968)は羽化ピークと産卵ピークのずれDを100日度、発育所要有効積算温日度Lを292日度としたが、1図に示す誘殺グラフや産卵状況から、1世代の必要温日度は400~500日度であった。従ってD=100、L=350で検討を行うと、両年ともほぼは場の発生状況と一致した。1968年は飛来が単純で、飛来後の発生経過は簡明であるが、1967年は飛来の最高ピークは6月26日、最多飛来期のピークは7月6日で、は場の発生主体は最多飛来期の7月6日の個体群であった。主要飛来ピークの決定には、飛来の時期と飛来の連続性を検討して決定する必要があるものと考えられた。飛来の乱れは、発生の幅として示され、特に9月以降は気温の低下と発生世代数で増幅されて示されるようになった。又産卵ピーク時にはは場の産卵ピークがこないのは、当期の卵期間や気温の低下等にもよるものと考えられDの値を大きくする必要はないと考えた。

考 察

トビイロウンカのは場における季節的発生活消長は、7月前半までの予察灯への飛来状況を基に積算温度の法則による実時間で補正せずに、ほぼ一致した。



第1図 予察灯の誘殺状況とは場の産卵状況

参 考 文 献

久野英二 (1968) 水田における稲ウンカ、ヨコバイ類個体群の動態に関する研究 九州農業試験場彙報14, 31~246.